

一 谷嫩軍記

熊谷桜の段

行く空も。

いつかは冴えん須磨の月、平家は八島の波に漂ひ、源氏は花の盛りを見る、中に勝れて熊谷が陣所は須磨に一構へ、要害厳しき逆茂木の中に若木の花盛り、八重九重も及びなき、それかあらぬか人毎に、熊谷桜といふぞかし。

花折らせじとの制札を、読んで行く人読めぬ人、一つ所に立ち集り、

「さても咲いたりく。花より見事なこの制札、弁慶殿の筆ぢやげな」

「さつても見事、一つも読めぬ」

「オ、あれはの、義経様がこの花を惜しみ、一枝切らば指一本切るべしとの法度書」

と、険しき体に

驚きて、相模は傍へ走り寄り、見るに見交はず互ひの顔、

「ヤア、お前は藤のお局様、ではないか」

「ムウ、さう言やるそなたは、相模ぢやないか。テモ久しや懐かしや」

「おゆかし様や」

と手を取つて、

「マアこなたへ」

と伴ひ入れ、親しき体に

心を利かし、軍次は勝手へ入りにけり。

相模はやがて手を支え、

「誠に一昔は夢と申すが、大内に御座遊ばす時、

勤番の武士佐竹次郎殿と馴れ染め、御所を抜け出で

東へ下り、お前様のお身の上を承れば、御懐胎のお

身ながら平家の御家門、参議経盛様方へ縁付き給ふとの噂。その折は世盛りの平家、御威勢は益々と蔭ながら

悦びましたに、この度源平の戦ひ。御一門も散り

「ヤア、花の代りに指切るとは、首切る下地、オ、怖や。見てゐる内も虎の尾を踏む心地する、皆ざされ」

と、花に嵐の臆病風、散りくくにご別れ行く。

遙々と、尋ねてこゝへ熊谷が妻の相模は子を思ひ、夫思

ひの旅姿、陣屋の軒を『こゝやかしこ』と尋ねしが、幕に覚えの家の紋、『嬉しやこゝ』と内に入る。

折節家の子堤の軍次立ち出でて、

「これはく、奥様か」

「オ、軍次、そなたも息災さうな。マアめでたい、めでたい。熊谷殿や小次郎も変ることはないかの。早う逢ひたい、逢はせてたも」

「ハ、旦那は今日御廟参、小次郎様は先頃より御前勤めでお下りなし。マアく長の御旅路、お疲れを

お休め」

と、挨拶取々なるところへ。

敦盛卿の御母藤の局、虎口の難を遁れ来てこけつ転びつ花の蔭、陣屋をめがけ走り着き、

「跡より追手の掛かる者、影を隠して給はれ」

くくと聞くにつけ、ア、この藤の方様はなんとなされた、どう遊ばしたと、一人苦にしてみましたに、マ

ア御機嫌なお顔を見て、おめでたやお嬉しや」

「オ、そなたも無事でマア嬉しい。懐胎で出やつた時の子は姫御前か男か。息災で育てゝゐるか」

と、ちよつと寄つても女子同士、問ふつ問はれつ年月に、積もる言の葉繰り返し、嬉し涙の種ぞかし。

藤の方涙ぐみ、

「世の盛衰は是非もなや。その時に産み落したは無官の太夫敦盛とて、器量発明揃ふた子を、今度の戦に討死させ、夫は八島の波に漂ひ、我れのみ残る憂き難

儀、浅まししの身の上」

と、かこち給へば、

「ア、お道理、お道理。以前の御恩もあり、連合ひにも語りお身の片付き後世の営み、お心任せに致しませ

う。以前は佐竹次郎と申して、北面同然の武士。只今にては武蔵国の住人志の党の旗頭、熊谷の次郎直実

と人も知つた侍」

と聞くより御台は、

「ヤア、そなたの連合ひ佐竹次郎、今では熊谷の次郎といふか」

「アイ」

「スリヤあの熊谷の次郎は、そなたの夫よな。ハア、ハツ」

と吐胸の気を鎮め、

「なんと相模、以前大内にて不義頭はれ、佐竹次郎と諸共に禁獄させよとの院宣。自らが申し宥め御所の御門を夜の内に落してやつたを覚えてか」

「ハツアその時の御恩、なんの忘れませうぞいな」

「ム、その恩を忘れずば、助太刀してそちが夫熊谷を自らに討たしてたも」

「エ、エ、そりやまた何のお恨みで」

「サイナア、最前も話した院の御所のお胤、無官の太夫敦盛をそちが夫熊谷が、討つたわいの」

「エ、そりやマア誠でござりまするか」

「ム、すりやそなたは何にも知らぬか」

屋の親仁め引立て来たれ」

「ハツ」

と答へて科もなき白毫の弥陀六を、平次が前に引き据ゆれば。

「ヤイ、なまくら親仁め。おのれ何者に頼まれ敦盛が石塔は建てたやい。平家は残らず西海へぼつ下し、誂ゆべき相手なければ、察するところ源氏の二股武士が頼みに違ひはあるまい。サア、真直に白状ひろげ。偽ると鉛の熱湯、背骨を割つて流し込む」

正直一遍、

「アモさても御無理な御詮議。先程も申した通り石塔の誂え人は敦盛の幽霊。五輪のことはさておき一厘も手付けは取らず、建つるとその儘石塔の喰ひ逃げ。せめて人魂でも手付けに取つたら、小提灯の代りに致しませうに、冥途へ書き出しはやられず、本のこれが損証菩提。あり様の申し上げ、願以此功德施一切。この通りでござりまする」

「サア、遙々と東より今来て今の物語、聞いて吐胸の誠しからず。追付け夫が帰り次第、様子を尋ぬるその間暫くお控之下され」

と、詞を尽くし理を尽くし、宥むる折に

表より、

「梶原平次景高所用あつて推参」

と呼ばはる声、

「十二梶原とや。見付けられてはお身の大事、まづ

く、こちへ」

と御台の手を取り、一間へ伴ふその内に。

程もあらせず入り来たる梶原平次景高、我慢に募る横柄顔、挨拶もなく座に付けば。

堤の軍次立ち出で、

「今日は主人直実志あつて廟参。御用あらば某に仰せ置かれ下され」

と、地に鼻付くれば

平次景高、

「十二、熊谷殿は他行とな。ソレ家来ども。その石

と、取り締めなき。

「ア、何仰つても糠に釘」

と軍次が詞に

平次は悪智恵、

「大方石塔を建てさせたわるも合点、合点。熊谷戻らば三つ鉄輪の詮議。まづそ奴めを引立て来たれ」

と、一間へ入れば

家来共、石屋の親仁を無理矢理に、引立て

熊谷陣屋の段

奥へ連れて行く。

相模は障子押し開き、

「日も早や西に傾きしに、夫の帰りの遅さよ」

と、待つ間程なく

熊谷の次郎直実、花の盛りの敦盛を討つて無常を悟りしか、さすがに猛き武士も、ものゝ哀れを今ぞ知る、思ひを胸に立ち帰り、妻の相模を尻目に掛けて座に直れば。

軍次はやがて覆ひになり、

「先達て平次景高殿、何か詮議の筋ありとて御影の石屋を引き連れ御出であり。奥の一間に御待ち」

と委細を述べれば、

「ムウ、詮議とは何事ならん。まづその方は一献を催し、梶原殿を饗応申せ。サ早く往け、早く往け。テサテ何を猶予する」

と、叱り散らされ

是非なくも、相模に顔を見合はして、心を残し入りにけり。

跡見送りて熊谷

「コリヤ女房。その方はこゝへ何しに来たやい。国元

出立の節、陣中へは便りも無用と堅く言ひ付け置い

たるに、詞を背くといひ、剩へ女の身で陣中へ来る

こと、不届至極の女め」

と、不興の体に

相模はもちく、

「そのお叱りを存じながら、どうかかうかと案じるは

小次郎が初陣。一里往たら様子が知れうか、五里来た

ら便りがあるかと、七里歩み十里歩み、百里余りの道をついで都まで。ホ、ホ、オホ、オホ、オ、辛気。

登つて聞けば一の谷とやらで今合戦の最中と、取々の

噂故、子に引かされるは親の因果、御了簡なされ下さりませ。シテこの小次郎は息災でゐますか」

と問へば

熊谷、詞を荒らげ、

「戦場へ赴くからは命はなきもの。堅固を尋ぬる未練な性根。もし討死したら、何とする」

「いゝえいな。小次郎が初陣に、良き大将と引組んで、討死でも致したら、嬉しいことぞござんしよ」

と、夫の心に従ひし健気な詞に

顔色直し、

「ホ、まづ小次郎が手柄といつば、平山の武者所と争ひ抜け駆けの高名。軍門に駆け入つての働き、手疵少々負ふたれども、未代まで家の誉れ」

「エ、してその手疵は急所ではござりませぬか」

「ソ、ソレ、ソレ、ソレ、まだ手疵を悔む顔付き。もし急所なら悲しいか」

「イ、エ、なんのいな。かすり疵でも負ふ程の働き

は、でかしたと思ふて嬉しさの余りお尋ね。その時お

前も小次郎と一緒にお出でなされたか」

「ホ、危しと見るより軍門に駆け入り、小次郎を無理に引立て小脇に引抱き、我が陣屋へ連れ帰り、某はその戦に搦手の大将、無官の太夫敦盛の首、取つ

たり」

と、話に

『さては』と驚く相模

後に聞きある御台所

「我が子の敵」

と在り合ふ刀、

「熊谷やらぬ」

と抜くところ

鎧掴んで、

「ヤア敵呼ばはり、何奴」

と引き寄するを

女房取り付き、

「ア、コレく聊爾なされな。あなたは藤のお局

様」

と、聞いて直美びつくりし、

「ハ、ハ、ハ、ハ、ア。こはく思ひ掛けなき御対

面」

と飛び退き、敬ひ奉れば。

「コリヤ熊谷、戦の習ひとはいひながら、年端も行かぬ若武者をよう惨たらしう首討つたな。サア約束ぢや、相模、助太刀して夫を討たせ。サなんと、なん

と」

と、刀追取りせり付け給へば、

「アイ、アイ、アイ」

と返事も胸に迫りながら、

「エ、これ直実殿、敦盛様は院のお胤と知りながら、どう心得て討たしやんした。様子があらうその訳を」
と、言ふも切なきうろく涙。

「ヤア愚かく。この度の戦ひ敵と目指すは平家の一門。敦盛はさて置き、誰彼と鎧を削るに用捨がならうか。イヤナウ藤の御方、戦場の儀は是非なしと御諦め下さるべし。がその日の戦のあらましと敦盛卿を討つたる次第、物語らん」

と座を構へ、

「さて去んぬる六日の夜、早や東雲と明くる頃、一二を争ひ抜け駆けの平山熊谷討ち取れと、切つて出でたる平家の軍勢。中に一際勝れし緋緘。さしもの平山遇ひ兼ね、浜辺を指して逃げ出だす。『テ健気なる若武者や、逃ぐる敵に目な掛けそ。熊谷これに控へたり。返せ、戻せ。オ、イ、オ、イ』と扇を持つて打ち招けば、駒の頭を立て直し、波の打ち物二打三打、いでや組まんと馬上ながらむんずと組み、両馬が間にどうど落つ」

「ヤアくなんと、その若武者を組み敷いてか」

「されば、御顔をよく見奉れば、鉄漿黒々と細眉に年はいざよふ我が子の年輩。『定めて二親在しませさん。』

るは母上の御事、昨日に変わる雲井の空、定めなき世の中をいかゞ過ぎ行き給ふらん、未来の迷ひこれ一つ。熊谷頼む』の御一言。是非に及ばず、御首を」

と、話す内より

藤の局、

「ナウさほど母をば思ふなら、経盛殿の詞に付きなせ都へは身を隠さず、一の谷へは向かひしぞ。健気に鎧ふたその時は、母も共々悦んで勧めてやりし、可愛やな。覚悟の上も今さらに、胸も迫りて悲しや」

と口説き嘆かせ給ふにぞ。

御尤とは思へども相模はわざと声励まし、

「イヤ申しお局様、御一門残らず八島の浦へ落ち行き給ふ、中に一人踏み留まり、討死なされた敦盛様。数万騎に勝れた高名。たゞし逃げ延び身を隠し、人の笑ひを受け給ふが、お前の気では嬉しいか。御未練な御卑怯な」

と諫めに

熊谷、

その御嘆きはいかばかり」と、子を持つたる身の思ひの余り、上帯取つて引立て塵打ち払ひ、『早や落ち給へ』

「と勧めさしやんしたか。そんなら討ち奉るお心ではなかつたの」

「オ、サ、『早や落ち給へ』と勧めれど、『イヤ一旦敵に組み敷かれ何面目に存へん。早や首取れよ、熊谷』

「ナニ、首取れと言ふたかいの。オ、健気なことを言ふたな」

「サアその仰せにいとどなほ、涙は胸にせき上げし、まつこの通りに我が子の小次郎、敵に組まれて命や捨てん。浅ましきは武士の習ひと太刀も抜き兼ねしに。逃げ去つたる平山が後の山より声高く、『熊谷こそ敦盛を組み敷きながら助くるは二心に極りし』と呼ばはる声々。チエ、是非もなき次第かな。『仰せ置かるゝことあらば言ひ伝へ参らせん』と申し上ぐれば、御涙を浮かめ給ひ、『父は波濤へ赴き給ひ、心に掛か

「オ、でかいた、でかいた。コリヤ女房、御台所この所に御座あつてはおためにならぬ。片時も早く何方へも御供せよ。サ、早く往け、早く往け。我れも敦盛の御首実檢に備へん。ヤアく軍次はをらぬか、早や参れ」

と、呼ばはる声と諸共に、一間へ

こそは入相の。鐘は無常の時を打つ、陣屋々々の灯火にいと悲しき

藤の方。

「ア、思ひ出だせば不憫やな。今はの際までも肌身離さず持つたるはコレこの青葉の笛。我れと我が身の石塔を建て、貫ふた倆にと、渡し置いたこの笛の我が手に入りしも親子の縁。魂魄この世にあるならば、なぜ母には見えぬぞ。聞こえぬ我が子や懐かしのこの笛や」

と、肌につけ身に添へて、尽きせぬ思ひやるせなき。

「コレ申し、その笛がよいお形見。経陀羅尼より笛

の音を手向けるが直ぐに追善。敦盛様のお声をば聞くと思ふて遊ばせ」

と、勧めに

従ひ藤の方、涙に湿す

歌口も、震ふて音をぞ澄ましける。

親子の縁の絆にや、障子に映る陽炎の姿は慥か敦盛卿

藤の局は一目見るより、

「ヤレ懐かしの我が子や」

と、駆け寄り給ふを

相模は抱き止め、

「香の煙に姿を頭はし実方は死して再び都へ帰りしも一念のなす所。あるまいことにはあらねども、訝し

き障子の影。殊に親子は一世と申せば。御対面遊ばさ

ば御姿は消え失せん」

「イヤナウ四十九日がその間、魂中有に迷ふと聞

く。せめては逢ふて一言」

と振り放しく障子ぐはらりと明け給へば、

姿は見えず緋緘の鎧ばかりぞ残りける。

「ハア、ハツ」

とばかりに藤の方、相模も共に取り付いて、

「さては鎧の影なるか。恋しと迷ふ心からお姿と見えるか」

と共に焦がれて正体も、泣き口説くこそ哀れなれ。時刻移ると次郎直実、首桶携へ立ち出づれば。

相模は夫の袂を控へ、

「コレ申し、これが親子御一生のお別れ。せめてお首になりともお暇乞ひ」

と願ふにぞ、

藤の局も涙ながら、

「ナウ熊谷、そちも子のある身でないか。野山の猛き獣さへ子を悲しまぬはなきものを。親の思ひを弁

へて情けに一目見せてたも」

と、縋り嘆かせ給へども、

「イヤ、実検に備へぬ内、内見は叶はぬ」

と撥ね退け突き退け行くところに、

「ヤアく熊谷、暫しく。敦盛の首持参に及ばず、

義経これにて見やうずるは」

と、一間をさつと押し開き立ち出で給ふ御大将、

「ハツ、ハツ、ハア、ハツ」

と次郎直実、

思ひ寄らねば女房も、

藤の局も諸共に、呆れながらに平伏す。

義経席に着き給ひ、

「ヤア直実、首実検延引といひ、軍中にて暇を願ふ

汝が心底訝しく、密かに来たりて最前より、始終の

様子は奥にて聞く。急ぎ敦盛の首実検せん」

と、仰せを

聞くより熊谷は、

「ハツ」

と答へ走り出で、若木の桜に立て置きし制札引き抜き、恐れげなく義経の御前に差し置き、

「先つ頃堀川の御所にて、六弥太には忠度の陣所へ向へと花に短冊。またこの熊谷には敦盛の首取れよと

て、弁慶執筆のこの制札。則ち札の面の如く御諚に

任せ、敦盛の首打ち取つたり。御実検下さるべし」

と、蓋を取れば、

「ヤアその首は」

と駆け寄る女房

引き寄せて息の根止め、

御台は我が子と心も空、立ち寄り給へば

首を覆ひ、

「ア、コレ申し、実検に備へし後は、お目に掛ける」

の首。イヤサコレ、お騒ぎあるな」

と熊谷が、諫めに

さすがはしたなう、寄るも寄られず悲しさの、千々に砕くるもの思ひ。

次郎直実謹んで、

「敦盛卿は院の御胤。『此花江南の所無』は即ち南面の嫩、『一枝を切らば一指を切るべし』。花によそへ

し制札の面、察し申して討つたるこの首。御賢慮に叶ひしか、但し直実誤りしか。サ御批判いかに」

と言上す。

義経欣然と実検ましまし、

「ホ、才、花を惜しむ義経が心を察し、ア、よくも討つたりな。敦盛に紛れなきその首、ソレ所縁の人もあるべし。見せて名残りを惜しませよ」

と、仰せを

聞くより、

「コリヤ女房、敦盛の御首、藤の方へお目に掛けよ」

「ム、アイ、アイ」

とばかり女房は、敢なき首を手に取り上げ、見るも涙に塞がりて、変る我が子の死に顔に、胸はせき上げ身も震はれ、持つたる首の揺ぐのを、頷く様に思はれて、門出の時に振り返り、にっと笑ふた面差しが、あると思へば可愛さ不憫さ声さへ喉に詰まらて、

「申し藤の方様、お嘆きあつた敦盛様のこの首」

「ヒヤアこれは」

「サイナア申し。コレよう御覧遊ばして、お恨み晴らして良い首ぢやと、褒めておやりなされて下さりま

せ。エ、ハア。申しこの首はな、私がお館で熊谷殿

と忍び逢ひ懐胎ながら東へ下り、産み落したはな、

コレこの敦盛様。その時お前も御懐胎。誕生ありしその子が無官の太夫様。両方ながらお腹に持ち、国を隔て、十六年。音信不通の主従がお役に立つたも因縁かや。せめて最期は潔う死になされたか」

と、怨めしげに、問へど

夫は瞬きも、詮方涙御前を恐れ、余所に言ひなす詞さへ、泣く音血を吐く思ひなり。

【藤の局は御声曇り、

「ナウ相模、今の今まで我が子ぞと思ひの外な熊谷の情け、そなたはさぞや悲しかる。かうしたことゝは露知らず、敵を取らうの切らうのと言ふた詞が恥かしい。我が子のためには命の親、忝い」

と手を合はせ、

「この首の生世の内、逢ひ見ぬことの悔しや」

と、共に嘆かせ給ひしが。

「これにつき訝しきはこの浜の石塔。敦盛の幽霊が

建てさせたとの噂といひ、秘蔵せし青葉の笛、石屋の

娘が貰ひしとて我が手に入る。最前その笛吹いた時、

あの障子に映りし影は慥かに我が子と思ひしが、詞も

交さず消え失せしは」

「アイヤ、その笛の音を聞いて駆け出だし敦盛の幽霊。人目ありと引き留め、障子越しの面影は義経が志」

と、聞いて御台は我が子の無事、悟りながらも帚木の

の、ありとは見えて隔てられ、またも涙にくれ給ふ。【

折節風に誘はれて耳を突き抜く法螺貝の音、喧すく聞

こゆれば、

義経は勇み立ち、

「ヤア、熊谷、着到知せの法螺の音、出陣の用

意々々」

と、仰せに

直実、畏り、急ぎ一間に入りにつけり。

最前より様子聞きある梶原平次、一間の内より躍り出で、

せ。エ、ハア。申しこの首はな、私がお館で熊谷殿

と忍び逢ひ懐胎ながら東へ下り、産み落したはな、

コレこの敦盛様。その時お前も御懐胎。誕生ありしその子が無官の太夫様。両方ながらお腹に持ち、国を隔て、十六年。音信不通の主従がお役に立つたも因縁かや。せめて最期は潔う死になされたか」

と、怨めしげに、問へど

夫は瞬きも、詮方涙御前を恐れ、余所に言ひなす詞さへ、泣く音血を吐く思ひなり。

【藤の局は御声曇り、

「ナウ相模、今の今まで我が子ぞと思ひの外な熊谷の情け、そなたはさぞや悲しかる。かうしたことゝは露知らず、敵を取らうの切らうのと言ふた詞が恥かしい。我が子のためには命の親、忝い」

と手を合はせ、

「この首の生世の内、逢ひ見ぬことの悔しや」

と、共に嘆かせ給ひしが。

「これにつき訝しきはこの浜の石塔。敦盛の幽霊が

「かくあらんと思ひし故、石屋めを詮議にこと寄せ

窺ふところ、義経熊谷心を合はせ敦盛を助けし

段々、鎌倉へ注進」

と、言ひ捨て駆け出す

後より、はつしと打つたる手裏剣は、骨を貫く鋼鉄の石鑿、うんとばかりに息絶ゆる。

「スハ何者」

と言ふ中に、

立ち出づる石屋の親仁。

「ハ、お前方の邪魔になるこつばを捨て、上げました。さて制札の御講釈、承つてまづ安堵。もうお暇」

と出で行くを

「ヤア待て親仁、コリヤ、弥平兵衛宗清待て」

と義経の詞に

びつくり、『ハッ』と思へどそらさぬ顔、

「ハレヤレとつけない。御影の里に隠れない白毫

の弥陀六といふ男でえす」

「テハハハハハハ、誠や、諺にも至つて憎いと悲しいと嬉しいとのこの三つは、人間一生忘れずといふ。その昔、母常盤の懐に抱かれ、伏見の里にて雪に凍えしを、汝が情けを以て親子四人が助かり嬉しき。その時は我れ三歳なれども、面影は目先に残り、見覚えある眉間の黒子、ナコリヤ隠しても隠されまじ。重盛卒去の後は行方知れずと聞きしが、テ堅固であたな、満足や」

と、聞くより弥陀六つかく立ち寄り、義経の顔穴の明く程打ち眺め、

「テモ恐ろしい眼力ぢやよな。老子は生れながらに聡く莊子は三つにして人相を知ると聞きしが、かく弥平兵衛宗清と見られた上は、チエ、義経殿。その時こなたを見遁さずんば、今平家の立て籠る鉄拐が峰、鴨越を攻め落す大將はあるまいもの。また池殿と言ひ合はせ頼朝を助けずば、平家は今に栄えんもの。チエ、宗清が一生の不覚。これに付けても小松殿御臨終の折

「ヤアく熊谷、障子の内の鎧櫃、ソレこなたへ」

「ハツ」

と答へて次郎直実、出陣の出で立ちと好むところの大荒目、鍬形の兜を着し抱へ出でたる鎧櫃、御目通りに直し置く。

「コリヤ親仁、その方が大切に育つる娘へ、この鎧櫃届けてくれよ。コリヤ弥陀六」

「ヤア弥陀六とは。ム、宗清なれば平家の余類、源氏の大將が頼むべき筋は、ム、ム、ヤ面白い、弥陀六め、頼まれて進ぜましょ。したが娘へは不相応な下され物、マア内は何でござります。改めて見ませう」

と、蓋押し明くれば

敦盛卿

「ナウ懐かしや」

と藤の方、駆け寄り給へば

蓋びつしやり、

「ア、イヤこの内には何もないく、オ、マな何にもない。ハ、ハアこれでちつと虫が納つた。ナウ直実、

から、『平家の運命未危ふし。汝武門を通れ身を隠し一門の跡弔へ』と、唐土育王山へ祠堂金と偽り、三千両の黄金と忘れ形見の姫君一人預り、御影の里へ身退き、平家の一門先立ち給ふ御方々の石碑。播州一國那智高野、近国他國に建て置きし、施主の知れぬ石塔は皆これ弥平兵衛宗清が涙の種と御存じ知らずや。今度敦盛の石塔詠えに見えし時も、御幼少にて御別れ申せし故、御顔は見覚えねども、心得ぬ風俗はヒヤ世を忍ぶ平家の御公達ならんと思ふより、心よく受け合ひしが、さては命に代りし小次郎が菩提のため、この浜の石塔は敦盛の志にてありけるか。チエ、いかに天命帰すればとて、我が助けし頼朝義経この兩人の軍配にて、平家の一門御公達一時に亡ぶるとは、チエ、是非もなき運命やな。平家のために獅子身中の虫とは我がこと。さぞ御一門陪臣の魂魄、我を恨みん浅ましや」

と、或ひは悔み、或ひは怒り、涙は滝を争へり。

元より聡き大將義経

貴殿への御礼はこれこの制札。一枝を切らば一子を切つて、忝い」

と、言ふに

相模は夫に向ひ、

「我が子の死んでも忠義と聞けば、もう諦めてゐながらも。源平と別れし中どうしてマア敦盛様と小次郎と取り換へ様が」

「ハテ、最前も話した通り、手負ひと偽り無理に小脇に引挟み連れ帰つたが敦盛卿。また平山を追駆け出でたを呼び返して、首討つたのが小次郎さ。知れたことを」

と鋭なる、

話に相模は噎び入り、

「エ、胴慾な熊谷殿、こなた一人の子かいなう。逢はうくと楽しんで、百里二百里来たものを、とつくりと訳も言はず、『首討つたのが小次郎さ、知れたこと』と没義道に、叱るばかりが手柄でもござんすま

い」

と、声を上げ泣き口説くこそ道理なれ。

心を汲んで御大将、勇みを付けんと

「ヤア／＼熊谷、西国出陣時移る、用意いかに」

と仰せに

直実、

「恐れながら先達で願ひ上げし暇の一件、かくの通

り」

と兜を取れば、

切り払ふたる有髪の僧、

義経も感心あり、

「ホ、さもありなん。それ武士の高名譽を望むも子

孫に伝へん家の面目。その伝ふべき子を先立て戦に立

たん望みは、ホウ尤。コリヤ熊谷、願ひに任せ暇を

得さするぞよ。汝堅固に出家を遂げ、父義朝や母常盤

の回向も頼む」

と親しき御錠、

「ハ、ア有り難し」

と立ち上り、上帯を引解き鎧を脱げ袈裟白無垢、

相模『これは』と取り付くを、

「ヤア何驚く女房、大将の御情けにて戦半ばに願ひの

通り御暇を賜りし我が本懐。熊谷が向ふは西方弥陀の

国、倅小次郎が抜け駆けしたる九品蓮台。一つ蓮の

縁を結び、今より我が名も蓮生と改めん。一念弥陀

仏即滅無量罪。十六年も一昔、夢であつたな」

と、ほろりとこぼす涙の露、杵に置く初雪の日影に融

ける風情なり。

「長居は無益」

と弥陀六は、鎧櫃に連着を掛けた思案の締め括り、

「コレ／＼、コレ／＼／＼義経殿。もしまた敦盛生き

返り、平家の残党駆り集め、恩を仇にて返さばいか

に」

「ホオ／＼／＼、ホ、オそれこそは義経や兄頼朝が助

かりて、仇を報ひしその如く、天運次第恨みを受け

ん」

「実はその時はこの熊谷。浮世を捨て、不随者と源平

両家に所縁はなし。互ひに争ふ修羅道の、苦患を助く

る回向の役」

「オ、サこの弥陀六は折を得て、また宗清と心の

還俗」

「我れは心も墨染に、黒谷の法然を師と頼み教へを受

けん、いざさらば。君にも益々御安泰、お暇申す」

と、夫婦連れ、

石屋は藤のお局を伴ひ出づる陣屋の軒、

「御縁があらば」

と女子同志

「命があらば」

と男同志

「堅固で暮せ」

の御上意に

「ハツ、ハツ、ハア」

有り難涙名残りの涙、また思ひ出す小次郎が首を手づか

ら御大将、この須磨寺に取り納め末世末代敦盛とその名

は朽ちぬ黄金札、武蔵坊が制札も花を惜しめど花より

も、惜しむ子を捨て武士を捨て、住み所さへ定めなき

有為転変の世の中やと、互ひに見合はず顔と顔、

「さらば」

「さらば」

「おさらば」

の声も涙にかき曇り、別れてこそは出でて行く